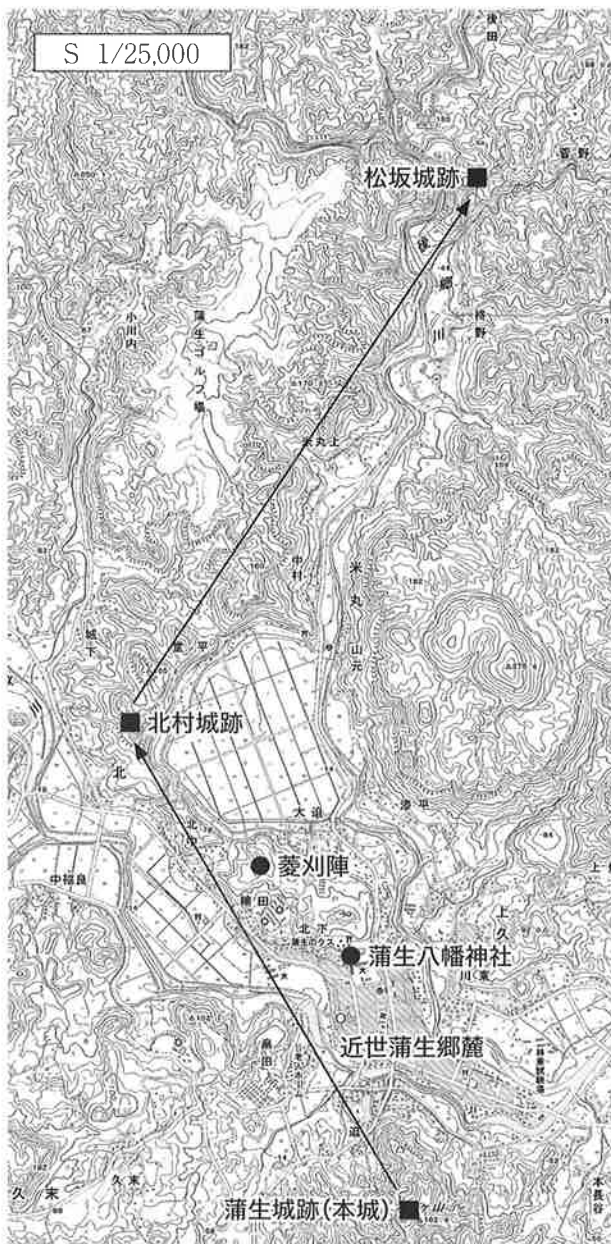


蒲生の松坂城跡について

下鶴 弘



第1図 松坂城跡位置図



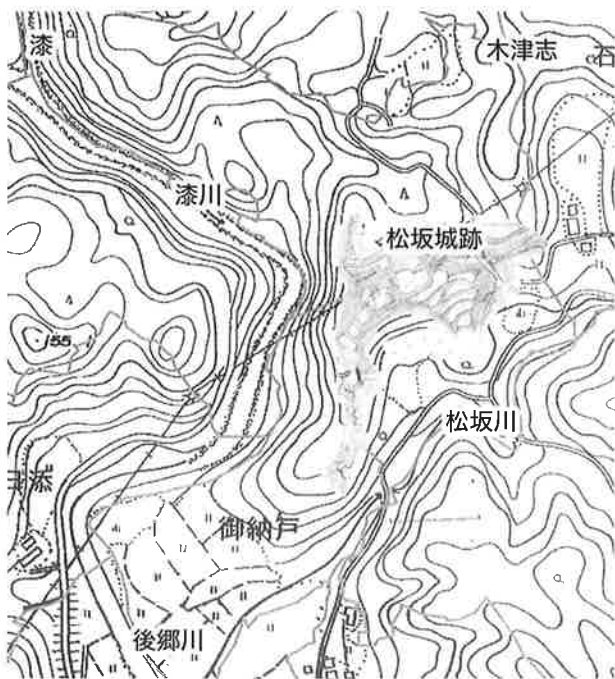
写真1 南西から主郭部遠望

1. 位置

松坂城跡は、始良市蒲生町の蒲生総合支所から北へ約4kmの山間部の丘陵にある。所在地は始良市蒲生町大字米丸小字松坂4998-2番地(主郭部)であり、城域を九電の高圧線が走り、最高所には鉄塔が建っている。遺構が確認できる面積は、10筆25,600㎡である。第1図にあるとおり、松坂城は本城蒲生城の北の枝城であり、対となる南の枝城は岩剣城である。本城との中間点には、つなぎの城として北村城がある。

城跡南側の下流では漆川と松坂川が合流して別府川水系の後郷川となる(第2図)。このため城域の西側は高さ百m以上の深い渓谷を形成して柵野集落の迫田を南へ流れる。城の東側は木津志から流れ出る松坂川が同じく山裾を削る。城跡遺構は略南北へ延びたやせ尾根約400mに残り、主郭部は尾根中央の東西方向に130m広がる。

蒲生中心部から延びた旧道を切通として城内に取り込み、北側の木津志・漆へ通じていた。現在では道は川寄りを通り城跡から車道は東へ遠のいた。蒲生城と祁答院方面をつなぐ重要な軍用道路として祁答院ルート上の松坂城は重要であった(第3図)。



第2図 松坂城跡周辺見取図



第3図 明治35年2万分1地形図

2. 年表

松坂城に関わる年表は以下のとおりである。

第1表 松坂城跡関連年表

天文18(1549)3月、蒲生・肝付(加治木)・祁答院氏ら吉田(島津領)を攻める。5月、島津方は肝付兼演の加治木を攻め、11月に島津氏へ降る。

天文23(1554)島津義弘は岩剣城で初陣を飾る。

北村城攻めに島津貴久は大敗し、歳久負傷、弟子丸播磨戦死。

弘治2(1556)10月19日、島津軍、松坂城を総攻撃し、城将中原加賀以下百余人戦死、同月20日、義弘漆攻めで切手園に陣し遠江ヶ壘落城。

12月島津貴久らは尼ヶ城(新柵)を本陣とす。

弘治3(1557)4月15日、菱刈陣は島津軍の総攻撃を受けて落城、同月20日、蒲生城の陥落。

3. 文献紹介

松坂城に関する文献史料は、『鹿児島県史料・旧記雑録後編一』によると、「39長谷場越前自記」・44「貴久公譜中」・45「義弘公譜中」・「山本氏日記三月之分、十月之分」など5点ほどあり、このうち2点を以下に紹介する。城に関わる用語は太字にした。

文献1 39「長谷場越前自記」(天文24年)11月

「一(前略)松坂城を被攻砌に者、爲先手忠平様(義弘)之御人衆、**大手の口**に押寄て、梅北宮内左衛門尉と名乗て真先に切て入り、**板城戸**を打破りける処に、寄手の兵もの落合てかぎはしを取り懸て、彼の城戸を引崩す、其時に梅北方者きどより下に打敷る、是を見て引退んとせし間に、御大将忠平様の切て入せ給へハ、爰をせんと、防戦す、この場をも被切崩、敵の兵もの打烈て詰之城にぞ引き籠る、彼城主中村父子三人者進出て防ぎ戦ふ処、渋谷の兵物廿騎計我先にと指合て、(後略)

年月日の想定には疑問があり、弘治2年と思われる。大手口での戦いが詳しく描写されている。梅北国兼が先陣をきって板城戸に取りつき、切り崩した際にそのまま落下してしまったため、攻め手の勢いが削がれたが、義弘の活躍で持ち直し、その後の激闘を制し落城に至ったという。ここでの詰之城とは大手口から離れた主郭の曲輪である。小城権現とは、鹿児島上町にある神社である。

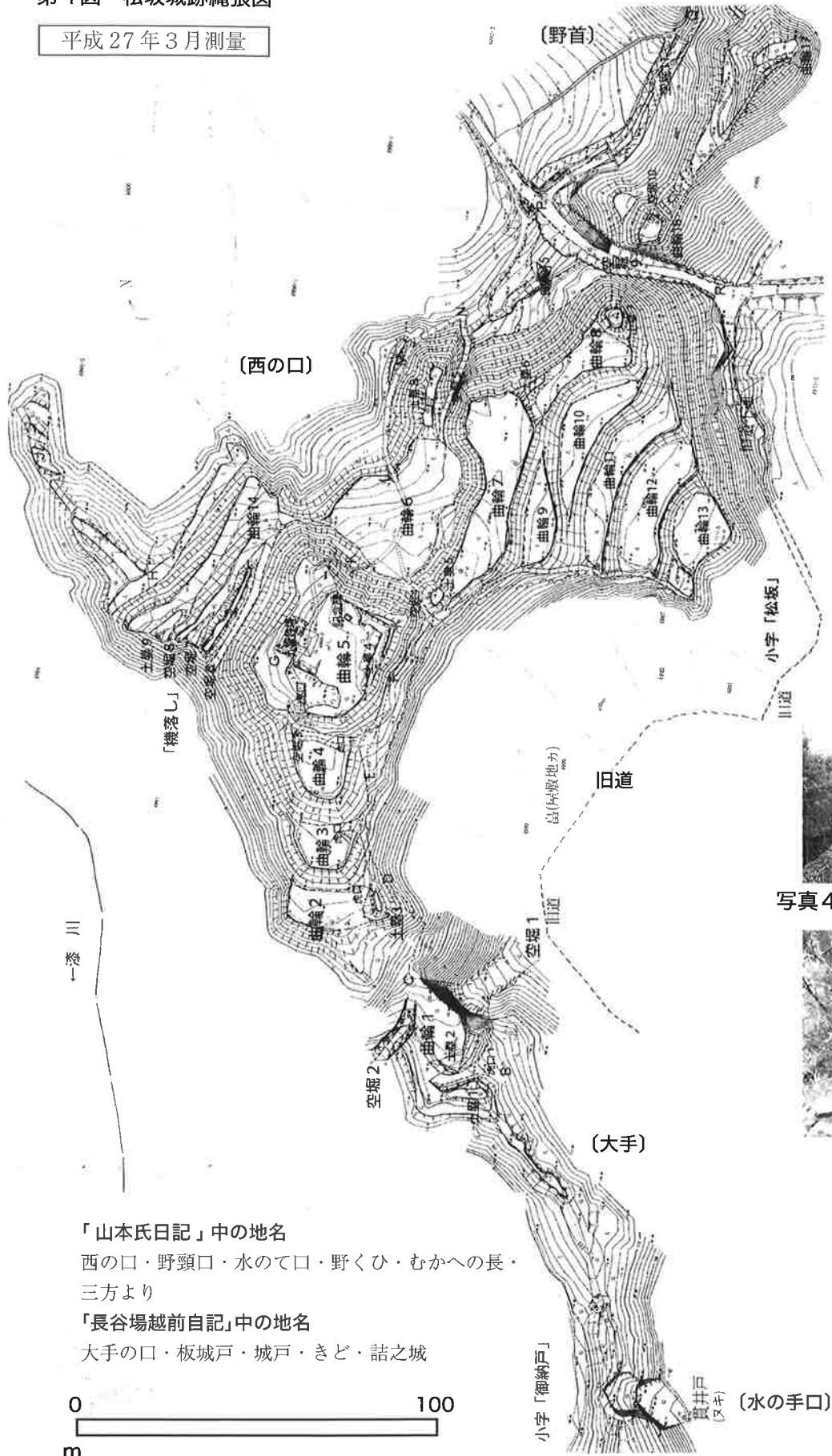
文献2 58「山本氏日記」(弘治二年)十月之分

「十九日、松坂の城に御衆違あり、其趣ハ又四郎殿様(島津義弘)鹿児島衆御供にて、西の口にさし寄候、野頭口ニは大隅の衆典廐(島津忠将)御大将ニてさしよせられ候、水のとりの口ニハ左兵衛佐殿南方の衆めしつれられ候て指よられ候、吉田衆 伊集院衆をハ、北村の衆から見のために二草ふせられ候、かくて明ほの、時分、三方よりときをあわせてせめられ候、城衆中ニも祁答院の番衆、其外三百計にてふせき戦といへ共不叶、則時ニきり掛れ候、西の口にて又四郎殿様御合戦めされ候、其外こ、かしこにて合戦有、(後略)」

松坂城は三方向から攻撃を受けている。

第4図 松坂城跡縄張図

平成27年3月測量



「山本氏日記」中の地名

西の口・野頸口・水の手口・野くひ・むかへの長・三方より

「長谷場越前自記」中の地名

大手の口・板城戸・城戸・きど・詰之城



写真2(上)・3(下)
空堀9切通し



写真4 曲輪4から曲輪5を望む



写真5 山頂記念碑



写真6 記念碑

4. 遺構

第4図は松坂城跡縄張図として遺構全体をまとめてみたものである。文献史料に見られた「三方向」の「大手口・水の手口」、「野くび」、「西の口」の表記を各曲輪群に想定して解説を加えた。

(水の手口・大手口)

南尾根の先端には、「ヌキ(貫)」と呼ばれる井戸跡(直径11m上下二段)がある。築城時のものであれば、古い井戸となる。山裾の「御納戸」には水田が広がり、その水源となったのであろう。「ヌキ」のある南の尾根筋を「水の手」と想定した。図以南には緩斜面が広がり、尾根を断ち切る空堀は見られない。

柵野集落から旧道を登り、空堀1の手前を左に折れると、内枳形虎口の「大手口」に達する。やや両脇が盛り上がるので土塁1・2とした。この空間の曲輪1は東西から迫る空堀1と空堀2によって城道は隘路となる。空堀1を下ると、旧道に達し、山裾を北へめぐると空堀9に至る。

文献1記載の大手口の攻防は、曲輪1でくり広げられたのではないかと。曲輪2の南端は一部崩落する。土塁3の東側を城道は通り、曲輪3・4の脇を抜ける。主郭の曲輪5には曲輪4の西側へ通らなければ虎口に達しない。曲輪5の規模は長辺28m×短辺22mである。東側の土塁4は東の通路に備えている。文献1での「詰之城」まで引いたという表現は、主郭の曲輪5を指していると考えられている。なお、曲輪5西側は鉄塔工事により削平を受けているが、遺構全体でみると、その印象は最小限に抑えられており、遺構全体の保存状態は良好であると思われる。

(西の口)

主郭の曲輪5西側には、高低差約10mの曲輪14がある。ここの特徴は平坦面を3本の空堀を切り、直進を妨げている。このタイプの空堀は平山城の高尾城西側にもあり、祁答院氏築城の技法である可能性がある。今後注目していきたい。川側は絶壁となり、最も川底に近くここが伝承の「機落し」と考えられる。尾根は北西に延びるが、空堀は見られない。

(城東部)

山裾の旧道を大手口へ左折せずに、道なりに進むと、空堀9の大きな切通に達する。入口Rから城側の曲輪8にある土塁7までは30m以上の高低差がある。空堀9では見通しが利かず、緩やかなS字を描く。堀底は現在通行のためにコンクリート舗装となり、本来の底面は不明である。

主郭曲輪5の東には曲輪6があり、虎口は空堀5しかなく、土塁8が守っている。曲輪6から曲輪5への通路は不明であり、空堀4のみが可能か。現在九電の管理通路が設定してあるが、城道とは無関係である。曲輪6は大きく地下げされた印象があり、主郭の曲輪5を一段高くかさ上げ補強するために犠牲となっているようだ。

曲輪6の代わりに曲輪7・8が城東部の主郭である。南側の緩斜面は曲輪9～13に削平されている。この一帯は小字「松坂」であり、急坂の旧道から地名が起り、城名になったと考えられる。

南麓の柵野集落には坂元神社があり、この坂元の「坂」は松坂由来と推測される。

(野首口)

切通の東側は城外であるが、曲輪18は土塁7より低く設けてある。曲輪17までの尾根は細く削り落とし、急崖となっている。この尾根裾を空堀11が通路として木津志・漆方面に延びる。

5. 最後に

松坂城から本城である蒲生城を直視することはできない。青敷の山塊を避けて、枝城の北村城・松坂城間は直見できる。

松坂城は小規模なつなぎの城であるが、文献史料もあり、同時期に合戦をもつ岩剣城や北村城と比較検討することで、蒲生・祁答院両氏の特徴的な築城技術を解明できるのではないだろうか。その作業の小さな一歩をここに記してみた次第である。

最後に、現地調査における土地所有者及び地域の方々のご協力に感謝したい。

【原稿送付先】

〒895-0072
鹿児島県薩摩川内市中郷二丁目2番6号
薩摩川内市川内歴史資料館気付 吉本 明弘
TEL:0996-20-2344, FAX:0996-20-2848
E-mail:senreki-6@po4.synapse.ne.jp

【会費納入のお願い】

振替口座 01760-3-84609
入会費 500円 年会費 2,000円
前納割引年会費
2年分 3,500円
3年分 5,000円